

ロシアの有名な昔話に「おおきなかぶ」がある。おじいさんがかぶを植えたが、あまりに大きく育って一人では抜けない。おじいさんはおばあさんを、おばあさんは孫を、孫は犬を、犬は猫を呼んで引っ張るが抜けない。最後に猫がねずみを呼んで一緒に引っ張って抜けるというお話である。登場するのは決して力が強いとはいえない者たちである。しかも最後に一番小さなねずみが登場して抜けるというところが面白く、また意味が深い。

最近こんな話を聞いた。小学校の音楽

## 昔田川

発表会があった。保護者の前でリコーダーを演奏するのだが、そのクラスに障がいのある子がいて、みんなと音がそろわない。そこで、担当の教員がその子のリコーダーが鳴らないよう、穴をふさいだとのことである。

昔、障がいのある人の施設に勤めていた関係で、小学校や中学校の音楽発表会を見に行く機会があった。知りあいの障がいのある子がいるクラスで、やはりリコーダーを使った発表会だったが、演奏が始まって、はずれた音が時々聞こえ、

13. 7. 2

大深 俊明

福山平成大学准教授

## ④ 活躍の場

なんとなくいたたまれない気持ちがあった。2分くらいの演奏がとても長く感じられる。そして、ようやく終わった。

その時である。音がはずれ、意に反して「目立ってしまった」その子が、「きょうはありがとうございました」とたどたどしくも大きく、はっきりした声で集まった保護者の方に向かってお礼のあいさつをしたのである。会場は万雷の拍手に包まれた。

教員の見事な計らいである。あのまま終わっていたのでは、演奏した子どもたちにも、聞きに来た保護者の方にも気まぐさだけが残ってしまったであろう。普通であればクラスの代表者がするであろう大役を見事に果たした。そのための練習も学校で繰り返し何度もしたに違いない。

私たちの身のまわりにも、家族や地域、学校といった単位の中で、子どもや障がいのある人、高齢者が大切な何かの役割を担っている。決してそれが脚光を浴びるものでなくても、そのことに思いを寄せたいものである。誰もが輝き、活躍できる場があるということは素晴らしい。